



朝本

醉菩提

稻妻後編



13  
3047  
6



特  
3047  
6

縮妻表紙後編本朝醉菩提卷之五

東武 山東京傳譯

地獄信解品第七 後談 醉月堂

一目地獄例の如く一室小籠坐禪して居り居るに一休和尚突然と入来  
ぬい一言とものゝるほど花器に挿る花とさうこれと拈て見せぬ(地獄の  
志づる小目とひらきこれとぞ微笑やぞ椅子とさうて居睡居る女童等と  
揺醒し耳はつきてさきさるに女童等うち點頭て身と起去るは  
ありて養酒嘉肴とさげ来りて一休の前におく一休喜ひあけをいひ  
大盃ととりわけ女童に酌とせせて數盃とたけ舌とさしてのゝるはあ  
養酒ある故世尊五十余年の連留も此花と拈て此養酒を得のめ汝は  
是代為の迦葉あり吾正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の機關を

本朝醉菩提卷之五

汝が為に悟きし。りる坐禪におろぐ。是非の門を絶却して。情と  
 りいまにせよとのまひて立上り。鉄如意を以て。さよ養麗は彩色  
 椅子と微塵のごとくに打碎別とも告あらず。飄々として取らぬひぬ。  
 かくて地獄の拈華微笑の問答に禪法の奥密と大悟し。胸中豁然  
 として夜のともめて明らるが如く。これより後任情遊戯と旨じ意と  
 りいまにして心中更に一物とぞりど。四大皆空あるごとく破し地水  
 火風の色小袖空即是色の紅粉も。まづ一重の臭皮袋とむかひたれ  
 身と悟唯活氣を以て本来の面目と。前よりもなまなまとして姿と養  
 麗と粧。名香とたきあめたる綾羅錦繡を身よまるとい。髪飾手道具  
 の結構に金玉とらりたる糸竹のちるべ酒宴のそまに清雅と尽てあるこの  
 標客に身とまをせられた。富翁嘉客戀まらひて千金を塊と。通

来る者数あれど。郭中三十の餘き。遊女等彼一人の為に色と失ひ  
 其名一時に高き。人れ物とわまされを。あらしき衣服とそのれに  
 旧衣服の妹女郎火車あふふ。一金の時中居下男等。出入貧者等  
 とうせられた家内の男女出入者等尊敬まるとあつと。あつと人愛日々  
 にもさき。金ある時衣服手道具の類を尽く質して用ひて常に  
 金銀とさるる。情と和歌にやせて日夜大酒と飲都爽と快  
 くと好と情の色も浅く。ごご。標客の心と。一度あふ者日く忘るま  
 めしむ。其もさる。所一つとして活潑禪機にわらざる。度々時乃人女  
 達磨と。いよ宜あり。かくて月日とわらるるに。地獄偶病に卧つ。そく  
 りのもすも。瘦衰たれば主珠名長大に驚夫婦ともに枕辺を  
 ともれと看病し。良医をむく。百薬を尽しぬれども露計も驗なく。

さして苦痛の体いあらざれども日に異にかりありまさらぬ一日地獄  
 のは夫婦に對していひけるは妻が病をも癒はしくちいさむべかりや  
 薬の用のまど死ぬる命いとしくぬど幼少の時より伊夫婦の情  
 深き養育にあらやいま十九歳にてさあめの年季もこそ身まろ  
 て損をかけたらうとこと妻が愁る所いひとつたあは夫婦の涙を  
 つろひてしめていそ。汝其更に於て少しも心をつひやを更あら  
 我汝が功にうけてこれまでい千金の大利と得られべと今今う  
 勤とやめさともいさう愁とせざれども唯はしき我く夫婦汝と  
 子の如くい七歳の時より手あひにかけて育あげのらくい養女にも  
 ありてんと樂に居に答の花と散さとも不便ともいふもいさ  
 詞いあらばしきさうに心弱とことつとぞ薬とらひて本はとせし

といひて益落涙をれば地獄頭を揺いあくとも本復らういが。よそ  
 生ありの一度滅する世のまひひていひかきむくし難あるまど  
 いといひて此後の薬とらひいぞ唯養酒と冷酒めて飲のまありかて  
 四五日をたぐるが又あは夫婦と近づけ今日末の下刺に已に妻が臨終  
 の時あり秘づくに住吉に使して一休禪師を請待しあられしとつた  
 あは夫婦今更のやうに打驚使と住吉につらうるに。はうの者  
 途中にて一休にゆたあは此時一休の野晒悟助と具い珠名が家僕  
 と見えひて汝何処よ去とこのまへ使の者いそがしく腰と屈禪師  
 と迎たてまつらんふまわの所いひとつた。一休のまろ。さうぞ獄の臨終  
 のゆゑあら。我今其更によつて汝が家のやういとちいさうで来は  
 ありとそ乃同道して珠名が家に到あは野晒の次の間は居しあ自の





妻禪法を皈依ふ所し此一卷を得しゆありとらひて野晒は後一  
 野晒これと受とてつも。此一卷の先年親人佐々木の若君花形九郎  
 附とせし物あり。花形九郎の我師の弟子となり剃髪し  
 胸月と法名し。諸國遍參し出らば刻親人のわづけおきし  
 物されば後日胸月ぶりに出會せば再返しやとて懐とさるる  
 此兄弟のつ子の者あり。愚痴ある度とらひあつて悲歎とされし  
 とゆに發悟せる者どもあれば一滴の涙もかたさど。唯輪回の一轉と感る  
 のもあり。時に地獄つひるのや妾が飯去の時到りたる其支度を  
 して一息して。雛妓小鬟に扶らし浴室にうつてゆわし。髪とせ  
 て平日の如くをでやりに結し。面は紅粉とらと。櫛掃枝を挿飾  
 白綾の小袖袴衣と著らして。水色のたぶら帯とむらひ。名香とら

紅の重裯坐して錦の夜着身と靠るるさぬ。日來は十倍と  
 ろく。梨花の雨にやめる風情芙蓉の水とらるる容貌今とら  
 人より更にいそぎり。これぞ此世のおどろきと。わが夫婦とらめと  
 去て。朋輩の女郎引船禿火車中居下男常に出入する男女按摩する  
 坐頭からせの老婆よりまで。わが世の人集來て。日來めとらうけ  
 こころを心のうちらひて嘆悲するいあ。鼻うらうむ音此彼にきこえ  
 手飼の矮狗までも別とかな。むみや。うづまうて涙をかこ。誠是世尊  
 涅槃の時よあひ。天人大會五十二類沙羅雙樹の下にたひて悲し  
 かくぞあつめとらるる。さて地獄とらとて。さうくづれも妾があつと  
 かしとあることか。ドけあさまでにおかあり。病疲ておがつるなれど  
 此世のかこに一曲とらうせやさん。さうひて。二人の雛妓は三弦といふを





体とかし居るに一休野晒に對しかうせよと命したまふ野晒  
立上りて地獄が亡骸を抱あげ、屏風の裏にこもりつけるに枕の下より  
一張の短冊出たり。彼が自筆の一首の歌とか、野晒其歌をよみ  
わづらひ

我死べ焼か埋か野よとて瘦る犬の腹をこませよ

一休これをよみあひ我のい一野呆てまう。彼檀林皇后遺令して  
其屍と西郊に棄しつると意ととあうどしも葬儀をりらるる  
彼が意に背ことあれとのさまが夫婦一休ののさま一野をじも  
さぶざぶと感嘆して其詞にあさぶよ。さて一休は白布の帷子とさうせ。  
経文と書てあふ野晒と此に残りおれて独飯庵一かかくて  
其夜に到り地獄がむらした骸を裸とま。経帷子一重を著せとく

桶のさうり野晒と交てまうに四五人あてこれと撞ゆらるに一休途中に  
出ひひて前立経を讀めりくとをさへあて。

緋出わのこころおれて生きたるのまの垣短き夜半に足一  
夢の長い刀に長脇差をびつらんでおせさういさ。

と都のぬめり餅と唄ひて踊狂つ。つさそひゆれあひのつひよ八木郷  
久米田寺の三昧まう。桶より屍と出。葆の裏に捨ちてぞ飯る。  
あうれさうの羨所まう。地獄が姿。七日くれ変トて。蘭麝を焼て  
る。緑の黒髪蓬の如くに乱色。錦欄をおろひる素肌。音腫上り。  
白粉をまごころる花の顔の腐て臭気と出。燕脂をのろさうり  
朱の唇へ爛て血と流を瘦る犬の麗玉と垂る乳を喰破。餓さ  
鳥の秋波をうせする眼とついでておそしき姿とある。平日にあうべ

凡音も唯松風と虫の音に残るものもあつた。こころぐの肉もまじ。腹も  
 破れて五臓六腑あつたに乱る。又後ハ肋の骨をわつへ。肉も腐流て  
 白蛆となり。青蠅集てわつり。臭気盛よ人と穢を。日と経て臭気  
 もうもく。骨に残る肉もふさ。蛆もくか。これ這散く。蠅も  
 飛失。髪ハ風に散て。草の根にまらぬ。あつた。く  
 四十九日も近くなる。男女のさふゆ。雨にそぎ日にさして。  
 今ハ臭香もあつ。唯残る物ハ一重の帷子の。つひハ一具の白骨あつて。  
 小年寺せめて香華と手向て其靈とまつ。ちやと爰に來り。此光景と  
 見て驚き悟執著の心と轉。色欲の念と断者あつた。四十九日に  
 あり。日一休和尚野晒悟助あつた。珠名の長夫婦と具して。此野は

来りぬ。地獄ハ白骨と引起て見せぬ。骨ぐのつひ鎖の如くよ  
 つまて全き一具の骸骨あり。皆これと見て奇異のぢひををるに。  
 一休のこまり。これと鎖子骨とあつた。これ凡人にあらざるの証あり。  
 彼ハ乃北方女宿婺女星の化とる。野あり。権ハ人間に降て美女と生  
 色と賣てわま。この人よあつた。死して爛穢の姿を見せ。九相の妻とる  
 理を示。是色欲に耽る者として驚悟せんが為あり。已は彼ハ  
 爛穢の姿と見て嬉樂のそつた。度と悟。行跡をわつ。色者あつた。あり  
 と。あつた。此度と後世に傳へる。誠ありん。かや用るに。此遺骨  
 原の天上にわつ。野晒に命。柴と集て茶毘させぬ。あつた。  
 煙のうらより七ツの星わつ。光明赫奕として空天に飛り。あつた。  
 諸其灰と埋て一ツの塚とせぬ。今ハ本郷久米田寺の境内にあり。

太平廣記

女郎塚とりの是より。此地獄が支観音救世の悲願に金砂灘頭  
の鎖子骨とありし遊女の昔語に似たり。

父母安樂行品第八

孝の百行のじりとして一切の善行のうち孝行より前よりなり。孝天にゆるるる風雨とありかきさぐい。孝地にゆるるる万物化盛と。孝人にゆるるる衆福添るとして。孝の徳にゆるるる五日の風枝と。あつさど。十日の雨塊と。うごさど。草木と。花咲実のり。五穀豊饒にして家富國昌とめられけり。凡孝の一字の百日千夜にゆるるる説つと支わたり。爰に泉列塚に程りたる湊村とありと。箕内とあり。武士の浪人あり。頭にきえぬ霜をいりて。額に皺の波と。うへ弓箭のうりに捨されど。腰の弓わたり。七十九にゆるるる老ぬれ

おも二君にゆるるる貧家の住居妻の六十歳のとも白髪夫婦とあり。正直に神の恵や深かり。世間にまれなる孝子と持其名と任助。いひ。きざれ。養男にて。年ひつと。十八歳若年なれど。萬にかり。朝夕父母にゆるるる孝と尽と。支當世の曾参とあり。ひらべ。父母へこれと喜び。我家貧し。これ孝子と持り。此上のこのこと。のうへゆるるる。平日に自慢し。るるや。住荒し。るる。茅の軒垣もまら。ら。か。篋陰に医師竹斎傳方。薬杉齒木とあり。看板を掛夫婦齒木と。ひらけて。不と立化助の土器のふい。賣して。薄ま。本錢の活業。と。ひらけて。不と立化助の土器のふい。賣して。薄ま。本錢の活業。清き心の。映月の赤土器。破も。ま。と。を。と。経。と。友に。又。堀甲斐町中濱の扇屋塵右衛門。娘小田井の眉目容貌。養鬻。年。十五の初花。るる。人。毎。又。氣。あ。つ。の。婿。に。と。め。と。望。の。り。婿。よ。

此女達磨の圖ハ南海  
祇園先生の自画讃也

幅一尺二寸あり

烏石山人の

所藏なり

好事の人

募志て石本

こゝ世小傳人予

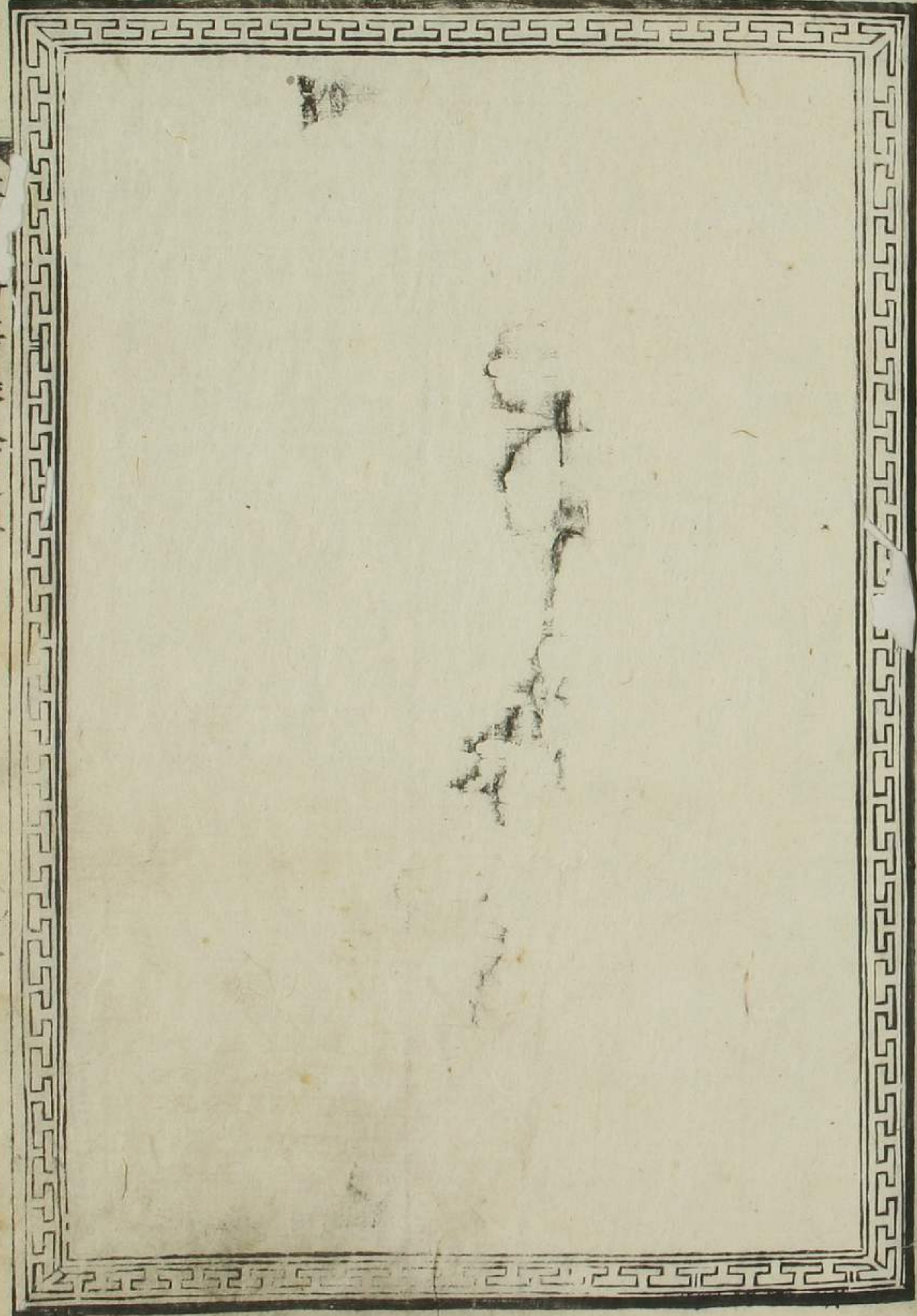
其一本と藏せり縮して

此よりわつと實是珍畫也

編圖



醒醒齋



あつちと望むあり。門は絶ざる媒妁の杖に立ちあがり朽る錦木はひら  
 たり。塵右清門夫婦娘と寵愛のあまう。婿えししてうけひささればい  
 こままる縁もあう打過るが一日彼任助土器の擔をわけて此辺を  
 賣りありき。塵右清門が家に呼入らきて土器を売らるが以時小田井扇を  
 折て店に居合せ偶任助をうりてけるに挑賣する者に似気もあは  
 風流士あられをばはくつる養男もありたり。わうめもせむえんこれに  
 忽心迷ひ魂身とわくがれ出て。志を前後もおやえざりたり。此日しる  
 意の重擔とわいそめて胸を焦しなれど。彼が住家もあうど。誰媒妁  
 一のてりひらうとまきうとまきう。唯心一つにあやまり。わひく此家  
 斑毛の飼犬あり。小田井れう馴てやうされぐの跡をまきうの萬のこ  
 意にあらういれを小田井も深く憐れ。一日小田井採せんよ出て

本 來 是 否 何 目 胡  
 子 弄 幻 妙 拈 得  
 花 深 多 交 世 苦 言  
 淡 笑



空とあがり。任助が夏とあひついで居る折しも。彼犬庭にありて  
 尾と揺と小田井見やりて。汝の我心と知まじ。我の頃日物かりひありて  
 あらも忘る更なるぞ。汝若心ありて我切なる志を意人に通つせ  
 られうと人にりのりみ如くひひるに。犬ちりくともて。尾と揺声を  
 ありて其詞をま入るるまなれを。小田井又りて。よて父う人の物  
 語にまつるに。わらじの書に陸機とつ人の飼る黄耳とつみ犬書  
 簡と古郷よとけける例もあり。其犬わどひのありを。汝我唇  
 と戀人にさげけれ。ばきやとひひるに。犬又声とあして。応が如し。これよ  
 ようて小田井硯箱を取出し。心のしめを書にまじし。これと竹筒に入て  
 犬の頭に結つけ。疾返書ととり来よとつみに。犬の牙がひいて。頓よ  
 走去れを。さていば。さげつるよとつ。其飯るを待居し。

迷異記  
 三

儲犬のうちに任助の家とのぞき馳行るに折しも任助の土器の  
 擔とびげて飯り。門首にて彼犬は會ぬ犬の任助が袿をくくしてひき  
 声とまじけるにぞ。何するやんとびうりつ。うつくしれを。頭は竹筒を  
 結つけり。何の心もあく取て見るに裏に書簡かうの物ありけきをを。  
 これ容易よんぶき物ありと。旧のどくりにして裏にうんをせりよ。  
 犬又袿をくくして引とむ怪むきん。犬任助をともむるとひとしく。  
 任助の書をえんとその心起り再筒をとりわけて昏とひられたるに。  
 其文に妾の甲斐町の扇折の娘小田井とやとりのにひ。君いつぞや  
 物賣においせしと見初て。かゝるやととるあど切なる心のうけかゝる  
 と書て奥の方に。  
 何しとゆよとてはなつ。つらけのまればとてけり。のちのぬつか

と書る筆もつとあうと。こその彼者我よおられる艶書あり。あうとに  
 開封しつるや。さよ。父母のゆさぬ不義のうら。昏見しとるうも道  
 あうと。よて行はしき者あれば大よこれと耻あひて。手をやく筒よ  
 とらり。犬の頭に結つけて追やるるに犬の本意あげはて飯り。小田井の  
 待佐て居る所。所に犬の来にえを。いあやうに返書とて来つる  
 久。筒と取て見るに我書あれば大よ愁ひ此書開封してあると見れば。  
 彼人の見あひに疑なり。返しとにあらう。あつた心つらに人か。と。或は恨  
 或悲これよりあひ益深くありて。此夜も泣あはし。次る日にうらと  
 つらとあひるるに。此うへに外にせんすもな。彼人のをにや打つけに  
 心のうけとつけきとて。若得心あは時。いつにもあり。果べいと。娘心の  
 一まぢにあひつらて。又被犬にむらひ。汝我を不便とらる。戀人のりとは

ちびたけけしとて犬の尾と揺て前に出んとを折ふ一父塵  
 右邊門の家にあつた母の目とあつてひそりに身支なす。庭口より  
 出て犬にちびたけつ。佐助が家にとりかへる。此時佐助が父母の番蕉  
 寺にまゝで家にとりかへる。佐助独留主と守りて居るに小田井の已よ  
 此に來りて佐助にわひ。とがしきまゝそれとてさあぐれんたゝるが。  
 佐助これとてうひひりぞ。つらて異見とてくくるにぞ。押返していつまき  
 言葉もあつ。唯涙を落して女子の口よりわらわらとがしきまきとていひて  
 危く見えたるにぞ。佐助これ短氣あつるまひるかといひつ。わらまき  
 て押さめりるが。庭に蹲踞居る。彼犬二声三声あつていひて。怪しか  
 佐助の惘然として現心もあつる。日來正しき行も乱れし鉄石の心

忽録て愛憐の情をさうに起り今のあつて切ある心へ入つて我身  
 こそも木石あつるにぞ。さづりわらまき志とあつてむなしくあつていひて。  
 こゝへあつてといひつて手とそれを小田井の甞生うららしてさ  
 かりあり。今更顔に紅葉を散して心頭突々と跳り一間のうらら  
 つぎかりてゆえとて折しも墨深の破るる衣と著る。まじり  
 する僧門首にさづり。頭を擡てひらき裏の方とつらとていひて。  
 やがてはちりくおつる土器の擔を奪んども。佐助のこゝろを奪ふ小田井  
 が手を放し。やれ賊僧とれ我命をつら賣物あり。形は似合ぬ。膽  
 ふとに奴か。とていひてさづり。わらまきの僧これと奪て走去に佐助のあつ  
 棒とて盗人よ賊僧よと呼りて追ひたり。小田井の独跡に残り。  
 門首は出つ入つて氣づり居るに父塵右邊門他所より飯がけよ。



此家の前と通りて小田井と見つけ。汝は何ゆゑ爰に來しぞといふ。  
 小田井の驚き。何と答へし詞さうりてさうりむさぬ。塵右衛門と  
 いひし。若き女の獨出のやうなうらぬさうり。此右の更かせと  
 呵つ。具して飯るに犬も後ふつて飯ぬ。化助はつひに賊僧にあひ  
 つどむ。家へ飯り。前程小田井に答へる。詞と夢の裏のやうに  
 おがえのやうく不羨のあうばんとせし。深く取のひらに共さ  
 父母も飯り。れを土器と奪き。更を語り。薄き本錢と打入る  
 商物を失ひ。翌日よりいりて活計すまさと。親子三人頭とあつめ  
 愁々。借小田井が母香晒の小田井が怒出。跡も。かの昏をひらひて  
 ひらき。艶昏るれば。さうりて更よとあひ居る。さうりよ。  
 塵右衛門小田井と具して飯り。妻とさうりたまぬ。さうりて乃野と

居ると連て飯り。とりて。彼の書と見せ。さうりてさうりて。塵右衛門  
 さうり。彼土器賣と戀。疑。彼へ挑賣する貧者るれば。似わ。さ  
 縁。角とれ。制を。夫婦語あひて。此後。目も。あさ  
 され。小田井の書と通する。事。信太の森の楠の子枝。ま  
 け。物。涙。交。海。濡。袖。干。つ。病と  
 ひ。始。唯。か。め。の。中。に。臥。る。が。漸。病。ま。り。て。さ。う。り。て。  
 医。療。を。尽。し。れ。其。驗。も。え。え。され。母。の。歎。ま。い。る。や。う。さ。う。り。て。  
 香。晒。ひ。そ。う。に。塵。右。衛。門。に。む。か。ひ。て。い。ふ。娘。が。戀。病。に。あ。や。む。と。妻。若。は  
 時。戀。自。死。に。至。人。の。目。と。う。さ。う。り。其。報。さ。お。そ。ら。う。さ。う。り。て。さ。う。り。て。  
 ところ。小。兒。の。命。は。の。え。が。な。れ。た。と。さ。う。り。貧。者。に。も。せ。よ。彼。と。婚。ふ。し。  
 娘。の。命。と。救。め。い。さ。う。り。と。さ。う。り。塵。右。衛。門。と。言。月。老。の。紅。糸。と。結。ぶ。や。う

うへせんをさへ。とて心を決し。媒人とす。これに媒人任助が。あつしよ  
 申して其更と談トるに。任助は。僕が如き貧人と富家の婿は  
 あつらん。さうさう喜ばし。其更に。老る双親を養ひ。身は  
 とくま。他家と續け。更の心に。まをせ。と。孝心深き者。れ。我の  
 幸と好ま。父母の。こと。その。おひ。うけ。ひ。う。され。を。媒人の。理。又。伏して  
 孝心と感。あ。か。が。ら。に。つ。ど。立。敏。て。塵右衛門夫婦に。か。う。く。と  
 う。り。け。ら。に。塵右衛門。と。ま。を。さ。す。そ。ん。殊。勝。ひ。る。心。ご。う。か。う。ら。る。  
 孝子と。づ。て。殊。更。に。この。ま。く。かり。ひ。ひ。あ。う。ら。る。彼。が。両。親。を  
 此。方。より。一。生。安。樂。に。養。て。隠。居。さ。せ。お。た。彼。寺。二。人。が。中。に。出。生  
 の。子。あ。ら。ば。実。家。の。名。跡。を。つ。ぐ。と。ま。ま。証。文。と。つ。く。と。ま。く。これ。よ。て  
 得心。し。と。や。り。に。今。一。度。法。無。今。を。さ。れ。う。そ。ら。ひ。に。ど。媒。人。を

再任助が。り。ふ。ゆ。れ。う。く。と。談。ト。ける。免。角。任。助。の。う。け。ひ。う。ど。父。其。内  
 傍。に。出。て。任。助。に。ひ。ひ。て。つ。く。か。よ。て。你。に。語。る。ご。う。我。宿。望。の。ま。と。も  
 と。の。ぼ。て。か。く。老。朽。ぬ。れ。と。そ。も。原。の。武。士。に。う。ら。ま。き。時。の。あ。ら。か。う。ど。  
 殊。に。塵。右。衛。門。の。さ。び。う。の。つ。ま。志。を。え。と。ひ。あ。ふ。と。無。足。に。せん。の。ゆ。  
 あ。れ。は。汝。の。縁。と。さ。さ。む。に。志。し。と。り。の。母。も。これ。と。ま。あ。ぬ。任。助。是。と。ま。  
 両。親。の。意。に。う。ま。い。あ。う。ま。ま。更。と。お。か。り。ゆ。ら。る。い。ま。む。ご。さ。れ。わ。う。と。そ。て。得。心  
 の。し。と。ま。く。と。え。ん。を。媒。人。立。敏。て。扇。屋。に。お。た。仕。ま。ぬ。一。き。と。ま。り  
 の。ま。く。と。り。い。に。ど。塵。右。衛。門。夫。婦。の。あ。う。ど。喜。び。つ。と。此。更。と。小。田。井  
 の。い。ま。せ。病。中。あ。ら。る。婚。姻。の。盃。も。も。さ。せ。あ。べ。あ。の。づ。病。本。復。の。よ。す。が  
 と。も。あ。ら。ぶ。と。あ。り。ひ。あ。う。と。う。う。一。吉。日。を。え。し。ひ。く。  
 婚。入。の。日。と。さ。さ。む。ぬ



高須阿曾比  
地獄之袿衣  
地獄変相首



傳云画工六郎兵衛八道  
蓮行繪を臨して繡作  
せしごと其氣性のたつた  
おのべり蓮行ハ永仁乃  
この人あり本朝画史よ  
出せり

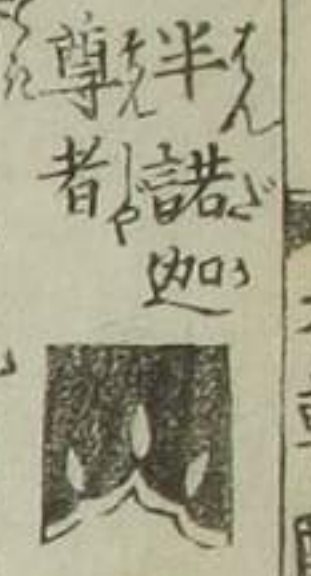
大月卒

十七

地獄後二此袿衣と卓圍は此方て丹後国成相の  
 観音堂よとむと淺井了意が尼の友とらふ  
 草紙よ見の



八大地獄と云ハ一ノ等は  
 二ノ黒繩三ノ衆合四ノ叫喚五ノ大叫喚  
 六ノ焦熱七ノ大焦熱八ノ阿鼻九ノ大地獄各十六の  
 小地獄有り根本ハは百廿八を加ハ百卅六地獄と云ル



畜生勸發品第九

此時専者も九月の尊もめあり。此頃尊の後の尊離尊として。九月九日にもまづる変  
 流例尊あり。これに小田井尊の病床尊の傍に尊氣尊と慰尊の離尊祭尊離尊の道具尊  
 と其尊終尊に尊墳尊の支尊と尊さ尊り尊て。己尊に尊婚尊入尊の日尊にも尊あ尊り尊て。母尊香尊晒尊  
 病床尊に到尊病人尊あ尊り尊て。小田井尊の髪尊と尊さ尊り尊て。擲尊箕尊と尊さ尊り尊て  
 肌尊に祝尊儀尊の白尊无尊垢尊也尊。と尊さ尊り尊て。病尊わ尊り尊て。瘦尊る尊顔尊の色尊あ尊ら尊ず  
 め尊て。床尊あ尊げ尊せ尊し尊と。親尊の心尊に祝尊酒尊者尊へ尊り尊て。吸尊物尊へ尊り尊て。執尊立尊  
 昏尊つ尊て。外尊に名尊あり。前の尊臭味尊も尊よ尊。野尊の櫻尊朝尊紅葉尊豆腐尊を尊さ尊り  
 交尊て。塵尊右尊衛尊門尊庖尊厨尊の者尊に命尊ト尊ま尊れ尊と。召尊仕尊の男尊女尊等尊割尊刺尊して  
 家内尊にお尊の尊ぐ尊。い尊ま尊り尊。さ尊う尊め尊に尊い尊ま尊り尊て。黄昏尊時尊一尊人尊の山尊伏尊  
 柀尊の杖尊に尊笠尊と掛尊頭尊襟尊眉尊半尊と尊責尊て。太尊刀尊と前尊低尊よ尊と尊さ尊り尊。

金剛杖尊と尊さ尊り尊て。門尊に立尊声尊と高尊ら尊に揚尊て。是尊ハ熊尊野尊三尊重尊の

滝尊は七日尊あ尊り尊。那尊智尊は百日尊籠尊て三十三尊所尊の巡尊禮尊の為尊に罷尊り通尊る  
 修尊驗尊者尊あり。掌尊の裏尊の施尊一尊われ尊と尊い尊て。螺尊と吹尊き尊と。塵尊右尊衛尊門尊の  
 袴尊著尊て。足尊打尊に長尊蛇尊毘尊布尊と盛尊る尊。これ尊と見尊て。わ尊か尊心尊あり。御尊房尊や。  
 家内尊に尊さ尊り尊て。通尊ら尊れ尊と尊わ尊ら尊り尊て。山尊伏尊の尊こ尊ま尊り尊て。  
 耳尊に尊い尊ま尊り尊て。頭尊を搥尊て。い尊ま尊り尊て。家尊の裏尊と尊い尊ま尊り尊て。塵尊右尊衛尊門尊の尊こ尊ま尊り尊て。  
 い尊ま尊り尊て。去尊を尊さ尊り尊て。山尊伏尊色尊と尊い尊ま尊り尊て。我尊此尊家尊と尊い尊ま尊り尊て。家尊と相尊せん尊と尊い尊ま尊り尊て。  
 あり。此尊家尊に尊い尊ま尊り尊て。必尊病人尊あり。家内尊に妖尊氣尊と尊い尊ま尊り尊て。物尊怪尊の崇尊あり。今尊四尊五尊日尊  
 過尊あり。病人尊の命尊あり。と尊い尊ま尊り尊て。我尊一尊祈尊せ尊ば立尊地尊に愈尊べ尊んと。信心尊  
 う尊す尊ら尊び尊に施尊さ尊れ。憐尊み尊と尊い尊ま尊り尊て。嘆尊息尊と尊い尊ま尊り尊て。塵尊右尊衛尊門尊  
 こんと尊あ尊り尊て。走出尊袖尊と尊い尊ま尊り尊て。引尊と尊い尊ま尊り尊て。恭尊礼尊を尊は尊い尊て。い尊ま尊り尊て。さ尊び尊ら尊し尊と尊い尊ま尊り尊て。

沙房と云ふ。不礼やせーひんにゆほしう人。今のさまひしにうらむ。  
 我が家病人あり。則娘はてい。これと救ぎま術のたぶ。哀祈てさへせ  
 給らんやとふ山伏し。人と救ひ我輩の好む処あれ。信心え深べ  
 救ごうと云ふ。とて草鞋をぬいて打通り。塵右衛門妻香晒よも  
 此更と語て山伏と病床にちらひたるに山伏をさうく小田井々  
 面と相し。果て是常の病にゆほ。物怪の祟あり。今の俗よ  
 つま王莽時にて。陽まらまうて陰おるの時あれを修法にわしと  
 時あり。今一時を過して祈禱にゆほ。是れが家内さうこの様子  
 あり。夫まであづりある一間に案内せしよとゆいあむ。内倉の  
 うらりある小坐敷にともあひ茶をこぼせ菓子とさあむとすれを。  
 山伏の端坐し。必心とつひ中へゆかり用あむ呼べーとゆいゆほ。

塵右衛門。さうくばゆほあつとゆいて退出。又婚姻のまうけふと  
 かりけるに。此時日へまうく暮に。借あづりくありて。前をさうの者  
 婿が子の来りあんとさうを。塵右衛門夫婦あらてまむ。これい  
 約束の刻限より二時をうりもを中を更よとさひけく出む。程あ  
 婿の来ると見るに。片木のおあひしたる白張の高張灯を二張さうして  
 前に持せ無常駕籠とあがり。くわいと元破塵をさうてまうさげあり  
 駕籠に乘輿添の者四五人下袴をさう。白張の手張灯とさうて  
 つまこひ来る。塵右衛門夫婦以体と見そ。と狂トさう出立哉病人の  
 嫁に對して。つまひーまふるまひあつと氣に。さうに。已に乘物を。店  
 さうに。まのげさ。戸を押しあけて。さう者と見れ。婿任助にゆほ。  
 麻上下にひれゆて。麻衣に鈍色の袈裟と掛さる。瘦法師あれを。

塵右邊門夫婦。いそそいそと唯あはきて。あべー詞もほ。やあて  
 塵右邊門袖まらして。の法師を。とらと白眼汝。いまいしと  
 葬礼の出立。とみし。婚とつらつて来。るの必定。今宵の誓。姻と妨人  
 来。つる。あま。つらに其故。と。我今。こを町人。あれ。原へ。両刀。も。帯。さ  
 者。ある。事。に。より。て。汝。の。勿。論。も。か。ひ。来。つ。る。者。ま。で。も。生。て。久。し。に。  
 と。臂。と。お。し。ら。う。て。白。眼。ま。り。つ。て。誓。を。彼。法。師。呵。々。と。打。笑。汝。の  
 葬。礼。の。出。立。と。い。ま。ん。し。と。い。ふ。も。今。宵。の。婚。姻。と。と。ら。り。あ。く。その。ま。  
 娘。い。り。と。う。婚。ま。で。も。三。日。と。ま。さ。ご。一。命。と。失。ひ。か。の。ご。と。に。无。常  
 駕。籠。に。乗。て。野。辺。に。送。ら。る。眼。前。あり。ゆ。ゑ。に。い。ま。ご。婚。入。り。婚。姻。の  
 不。益。と。せ。ら。う。ら。に。其。因。果。と。説。は。せ。娘。の。病。と。救。つ。ら。え。為。小。来。つ。る

あり。我。と。誰。と。う。ろ。ふ。我。は。是。任。吉。林。菜。庵。の。一。休。あり。と。の。こ。ま。ん。の。塵  
 右。邊。門。夫。婦。へ。大。小。驚。き。頭。と。ま。り。つ。け。て。敬。塵。右。邊。門。某。眼。あり。な。う。う  
 活。佛。の。来。速。と。あ。く。ど。不。礼。や。せ。一。更。い。ひ。と。ん。に。免。し。あ。ら。う。と。う。と  
 い。く。化。に。り。時。に。一。休。輿。漆。の。者。等。に。對。て。の。ま。り。墓。守。の。霜。四。郎。  
 衣。屋。の。針。兵。衛。繪。仏。師。の。箔。七。株。香。賣。の。香。助。石。塔。屋。の。石。六。い。づ。れ。も  
 大。儀。至。極。あり。く。や。用。か。い。飯。られ。よ。その。駕。籠。へ。損。料。の。借。物。あれ。ば  
 損。ぬ。ぬ。や。う。に。か。け。ゆ。に。我。菴。室。に。入。あ。れ。られ。れ。よ。と。の。こ。ま。ん。此。者。等。の  
 い。と。ぬ。や。て。飯。多。く。諸。塵。右。邊。門。に。む。る。娘。の。病。床。へ。案。内。せ。よ。と。の。こ。ま。ん。の  
 香。晒。い。と。先。刻。熊。野。泰。の。山。伏。あ。い。し。て。今。祈。禱。に。か。ら。う。可。あ。ん。へ  
 ち。つ。く。抄。待。さ。さ。れ。う。と。う。一。休。これ。と。ま。あ。其。山。伏。も。い。ふ。り。し。て  
 奴。あり。何。れ。も。あ。れ。疾。案。内。せ。よ。と。の。こ。ま。ん。い。づ。れ。ぞ。せん。と。あ。く。病。床。ま

ろちひたして。夫婦へ其傍に居り。此時の山伏の祈禱と始ん  
 として。病人に對居りけり。一休と顧て。汝は何の爲に來りやと問ふ。  
 一休のるなり。我へ此病人と祈ありん爲に來り。山伏嘲笑ていへ。  
 見れば。食ひひき。僧あるが。汝はなまの奇特なり。此疾病とありて  
 べきや。かゝるいふる。其ありて。一休のるなり。もろく。汝と我と法かと  
 うふべし。山伏のり。面白きのみあり。且我効験と見せし  
 こそ。衣の袖と巻のげ。大最多角の赤木の念珠とさらり。と。押揉て  
 一に狩羯羅ニ。制吐迦とにじりて。揉に揉でもろく。祈れとて。唯  
 おのが。汗水の流るの。にて。其の驗も。一休こそ。見あり。  
 汝が。修法へ。その。を。我法力の奇特と見せし。そののけと  
 の。袖の裏より。一擲の焼飯を。と。病人の

目前に出して。ころく。ころく。この。小田井へむくと起り。  
 焼飯と見せし。と。の。犬の。振と。煙。わが。執。堪。  
 やとさけびて。一休。香。晒。命。小田井。上。著。の。兩。肌。と。脱。  
 あ。の。怪。哉。肌。著。の。白。无。垢。熱。氣。に。焦。て。と。黒。く。色。づ。恰。  
 斑。文。犬。の。毛。色。の。と。一休。折。敷。の。上。に。の。焼。飯。と。お。て。の。さ。  
 つ。物。も。ら。つ。る。小田井。是。と。見。せ。し。け。小。口。と。つ。け。食。体。餓。  
 犬に。異。なる。事。食。と。又。の。如。く。に。卧。て。と。げ。ふ。す。や。と。  
 睡。けり。一休。山。伏。に。む。い。の。我。法。力。の。汝。さ。ず。や。我。へ。是。一。休。  
 たり。の。の。山。伏。へ。一。休。と。名。と。す。と。大。は。驚。さ。る。  
 体。よ。て。物。も。ら。つ。る。と。走。出。て。裏。口。より。逃。去。り。塵。右。門。に  
 一。休。の。奇。特。を。感。じ。彼。山。伏。深。く。耻。づ。ら。や。わ。へ。て。爰。に







容易にうけひくると。兎角してやうく今宵婚姻の盃とてさそひて  
仕あせ。夫婦ふりの盃をみる三日と過さど兩人ともいそ殺し。  
畜生道にわさむとあひゆるの。一休袈裟とありわげの近くすみて  
のさる。汝等洞九郎と恨いさるもいづれど。科多た娘にたると  
理にあらざ。さすぐ畜生の愚痴多る心あり。狗子仏性の有無を  
滅却して本来空にいつつを。仇も恨もあぶらうどこのさすい。  
又一越声をあげて。

會元四

僧傳 下室

擊狗又擊香卓。狗有情即去。香卓无情  
自任。情與无情如何。作麼生如何。  
有無である何かりあぶらう趙列もあぶらうはれの犬の一色  
とのさすい。一鳴いひえれ小田井踊上りあかたふとや抜昔の道と得さ。

今此娘の胸間と出去へ。いひとりて倒伏するが。あぶらうくわりて又  
起上り。惘然として夢の醒さる如く。一陣の涼風雲霧と吹松。一輪乃  
明月暉のさるらちして。病さるまら平愈。常の如くにありたれ。  
塵右滂門夫婦小田井もともい一休と拜して。喜ぶことあまらる。

羅刹 處女投記品 第十

其折しも又むこが私のおりけると告る。あぶらう一休麻上下と著  
父箕内夫婦も礼服と著て相ともあひ。婿入舅入を一度に畧しと  
入来り。坐敷に通るるが。一休一休とつづいて。汝の前には我土器と  
ぬき。賊僧にあらざるといひて。氣色とつくられ。塵右滂門これを  
疎忽多るまといふ。不礼とく。是は一休禪師にてあつとそとの  
一助へか不審氣にて。一休の顔とひさす。打まりぬ。時に塵右滂門

小田井が口走つる始終をくく語り。一休の教化より怨魂立去。  
小田井が病頓に平愈するはと語るべ。此助親子とて言て且驚  
且喜ひ一休の道徳を感嘆も一休衆人に對てのさなり。我侪等が  
因縁を詳に説きとくればくくべ。さて衣の袖をかき合せて  
のさなり。塵右衛門十八年以前訛麻彦惣とて大和國二上嶽乃  
麓に住し時舅洞九郎が急難を救ふ為に妻香晒に命じて更級  
肩衝の茶へと賣いつく。香晒其價の金と途中より奪つ。其  
盗人の胸毛黒平とて人者あり。これより香晒我父と賣て父と救んと  
る。已に胎内の児と墮せんとして折節金へまづれ五十兩金由  
我子と殺りと。独言しつるとして不便に思ひ持の存する五十兩の金とて  
救し。門説經の修行者へ則此一休あり。我其比は山城國岩倉山の林鹿小

の。檀越の布施物おられた時へ貧人と救ふ為に金と懐に。門説經よ  
姿と扮して近國他郷と徘徊せり。其時一陳の風一通の書と吹落て  
我前にあり。拾取て見しは是香晒が書おられたり。其孝心深きことを  
知る孝婦とてくも救し。我自喜びぬ。其後香晒安産するに。  
洞九郎が悪計にて其孩兒と撮別合法が辻に捨り。又箕内が原乃  
名へ穂波垣右衛門とていつん。汝白炭の忠知に仕へし時主人の命を  
うけて七十兩の金とまづる。更級の茶入を買とらん。撮別に  
のやまりて其金と合法が辻に落し。捨子とていつん。其子へ則  
此任助にて塵右衛門夫婦の中に出生の子あり。これを小田井が為  
同腹の兄あり。洞九郎へ孫と捨て飯る時垣右衛門が落し。七十兩の  
金とひろひ家に飯る途中二上嶽の窟峠にて胸毛黒平にをり。



法人のわらをやらん。悟助の掌とてと打てて、此家の侍親子あて  
 ひひくをたがひにそくぐり、再會とうきくしとくり、一休へ削符の金と  
 ころいご。此うち五十兩へ茶入の價、汝が手にりるべき因縁の金とて。  
 塵右衛門に渡し、あひ残る七十兩へ垣右衛門、汝が失ひし主人の金とて。  
 削符とて、汝が手に飯とて、そとくあひ白地の扇とて、そとて華硯を  
 乞とて。扇の面に鳥の形と多て、佐助にむかひ前の日、汝小田井と  
 むごく不義におくぐり、とある時、我、汝が土器と奪し、ゆゑ時を失ひ、  
 不義におくぐり、これ畜生道のあるまゝ、汝とせま、我方便なり。此扇、汝  
 養親に對し、と反哺の鳥の孝行と賞ト、かの土器の價として、けしんを  
 ありとて、あつて、一休の鳥扇とて、今に其形と傳るは是あり。又のなつて、  
 更級肩衝の茶入、今當津目口町鹿野屋何某とく、上者の所藏とあり。

千金にもつと、がた空とて。さうなつて、七十兩の元金と償、此扇と証として  
 我傳言と通し、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 家と松別にくく、と平野の里にあり。幸我親交るれば、飯黍をとり、うち  
 けしんを、このつと、あつて、佐助親子の喜び、つと、つと、つと、つと、  
 ひひあひ、汝が書きた、我手に入し、とて、持飯て、何の心も、つと、  
 といふ、あつて、十八年過て、偶今朝、つと、つと、つと、つと、つと、  
 と、説き、因縁とあり、そ懐、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 用、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 假名の、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 示を、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 挿、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 薄の、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 笄とて、袖の衣紋の、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 髑髏の、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 眼中に、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 離棚に、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、つと、

大月 幸三 是



いぬの  
やまの  
とら



泉州環甲斐町中濱  
扇屋座右衛門娘  
大の病と  
休師山伏と  
因縁と  
説て教化

土器賣  
助

才草野著撰卷之五

十八

犬張子とてしめて。其傍にあり。鳥の扇をさうざうとぬぐひ。汝等  
 こんとんよ。是乃化野ののりさぬあり。養人のいまれ高かりし小町が顔色  
 今つづくにわの。白骨とありて朽ねれば。かくる髑髏のわさめく。小野と  
 つく。薄生野辺の屍と食破る。煩惱の犬張子唯残まらぬ肉とわらふ  
 鳥扇の骨のこころ。つづくにわの。いけて小田井は無常と観し。と  
 涙をたろ。尻にあらん。夏と移るぬれ。一休頭をありぬ。汝年若して  
 剃髪せん。い不可あり。其終に子孫とまうらるる。考行なれ。宿世の  
 業と果さんとあり。汝自百日の間。往來の人の煎茶と施に志あり。と  
 こそ。さあぬ。わの。小田井の薄の筭と香晒が書おれに。色て犬張子の  
 裏にとさめ。如是畜生発菩提心とのぬひ。如意と以て犬張子を  
 こそと打ぬ。庭に蹲踞ゆる。飼犬一声。さうと身とさうと。いんし。

くさけをかうに失て。五つの心火空天に飛去る。さかくこれを見てもく  
 奇異のさひとあり。一休のさぬ。此犬張子へ此まうらるる。塚とる。と  
 彼犬のの菩提をさうと。と教ぬ。塵右清門夫婦口とひとさうして  
 つひけぬ。我く夫婦父洞九郎が菩提の為娘にかりて。剃髪し。と  
 いと秘ぐ。一休其儀へ望れ。まうと。と。剃刀と把て。塵右清門が  
 頭髪と剃れ。香晒が髪と斬て。斬髪とほしぬ。塵右清門が法名と  
 休阿弥とあり。香晒が法名と休市とあり。是扇折剃髪し。と  
 阿弥号とつ。其妻斬髪して。市の字とつ。始あり。と。さうと。一休へ  
 別と告て。出ぬ。と。さかく。拜礼して。門か。さう。一休何やん。悟助よ  
 耳うら。あぬ。悟助うら。うら。あづ。窺戸をく。さう。且さぬ。ふ。と。さう。ふ  
 前程の山伏軒下の闇裏より。はと。出て。悟助が襟に掛ける。袈紗表と



化野警諭圖



さぐりて打うかづ。腰刀とさぐりて只一打と斬つる。悟助へさ  
 りとく。かの朱太刀と扱はしてとらしとらけとめ。丁々ちとて斬むす。  
 そのひみに一休店さぐりて残りあり。白張の張灯に火と點して外の  
 方に出山伏の面さぐりに張灯をさぐりつけたまを悟助へ山伏の顔と  
 見て。汝へ提婆仁三郎にわづらむとて。さて一休はさぐり。野晒はさぐり  
 うとら驚き。大膽不敵の仁三郎も。さぐりて。本事に懲敵。さぐり  
 るひらんに。足出して逃去。悟助へむと追人とせ。一休はさぐりとさぐり  
 るひ。彼も又おのづから。誅戮にのり。時あり。打捨て。さぐりて。来よとのさぐりて。  
 悟助に張灯持せて前に立住吉とさぐりて。取らむひぬ。〇めて。任助を  
 一休の教の如く。鹿野屋にゆた。七十兩の金と償りの扇を証とさぐり  
 茶入を乞うて。飯を。箕内へ大に喜び。父子とも。主君忠知の

りてゆた。茶入をよそまらうて飯黍を種ひたるに。忠知ハそ一休の物語  
少て。彼寺が忠孝の金き事とくく。守居を頼。頼又飯黍とゆ。一  
本知に如増一のふらるほど。箕内ハ旧の如く。穂波垣右清門と名告。  
父子ともいままさしく忠勤とんげもろ。忠知ちひもろ。彼茶入十八  
年と過てぬ不思議に手に入ら。まろく。任助が孝行の徳もろと。  
これよりかの茶入を任助肩衝と名づけ。うろた室と。深く愛玩  
せしや。後に利久の秘藏とあり。捨子の茶入とる名物とかりし  
これありと。塵右清門ハ和州郡山の寺院。又所縁のなる。かの犬  
張子と其寺の境内にうろて塚と。郡山の犬塚とて今にあり。小田井ハ  
我嶋小假家とて。百日の間茶を施し。今於鯛茶屋とてあり  
其旧跡ありと。これより垣右清門塵右清門一家のちまをむまひ。

任助ハ妻と娶。小田井ハ婚。どりしてともいあまの子とまろけ。四  
富昌もろとあり。一休和尚扇屋ハ婚入し。いといつて入るん  
非あり。実ハ如此と。彼地の人の口碑に残りぬ。

本朝醉菩提卷之五終

○此末に残る六回と三冊にありて後。後  
當十月下旬。相違賣出。一冊のりなり。乃  
本屋少。清水浄覽で下る。文亀堂

- 明本醉菩提傳 ○ 一休年譜
- 狂雲集 ○ 一休品物語
- 佛鬼軍 一休自畫自作繪卷物 ○ 一休不審雙紙
- 科註法華經 ○ 鬼貫句選
- 九相詩 ○ 其角焦尾琴
- 山州名跡志 ○ 阿弥陀經
- 往生要集 ○ 十王經
- 方丈記 ○ 三代實錄
- 地藏經 ○ 五雜組
- 後太平記 ○ 傳燈錄

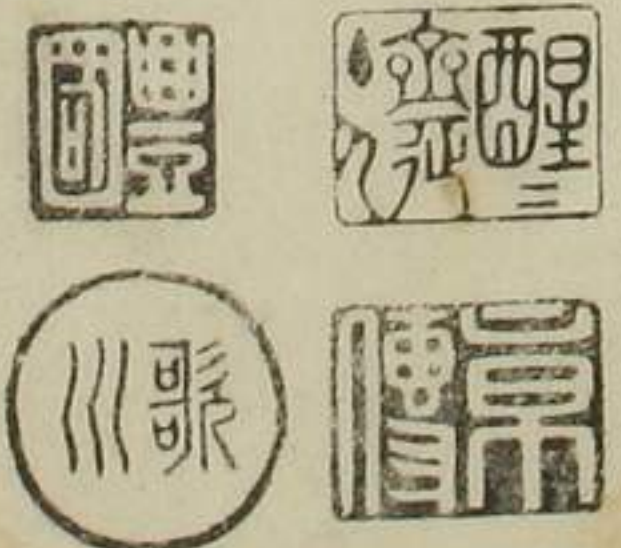
- 達磨禪經 ○ 源平盛衰記
- 和漢三才圖會 ○ 梁塵愚按抄
- 泉州志 ○ 堺鑑
- 血盆經 ○ 五燈會元
- 人天眼目 ○ 人天窰鑑
- 圓語心要 ○ 無門關
- 禪林類聚 ○ 撰集抄
- 元享釋書 ○ 敬雨朽葉集
- 傳法正宗記 ○ 三教指歸
- 見ぬ世の友 ○ 本朝畫史
- 七十一番職人歌合

- 太平廣記
- 迷異記
- 無門語錄
- 僧寶傳
- 其角五元集
- 因果經

通計四十七部為編本朝醉菩提傳於于翠竹深處之醒齋中抄讀之

東都

醒齋京傳編  
一陽齋豐國畫



傭寫 橋本德兵衛  
刷人 小泉新八郎

腹筋逢夢石

歌川豊國画

鳥居清満のうとや... 鳥居清満のうとや... 鳥居清満のうとや...

京傳店商之物之口上

○きん地紙を... 京傳自画讚扇... 讀書丸... 老若男女... 京山篆刻... 加味奇... 大極上...

文化六年己巳秋九月發行

江戸本石町十軒店

西村宗七

開版所

同 小舟町二町目

伊賀屋勘右衛門

再刊 繪鈔 校本庭訓性来 全二冊 浪速峰岸祐父先生校正并書 近刊 東都載斗先生画

庭訓性来、本朝古流の文章なるの昔、世人の志より、余が花板小陰鈔  
庭訓性来より今流布の本と同く文字脱漏あり、惟字違あり、近來三都の刊板に  
皆同様にして、吾本を以て、きめり、因て、再刊の次第、岸先生、世風を以て、  
未板のむらさきより、授て、筆耕の、いと、淡く、先生、云、庭訓の授、  
解、が、ねの、多、中、も、九月十月の、佛家の、宿、谷、  
流解、も、杜撰、あり、外、小、  
又、或、家、亦、花、の、古、言、  
余、と、  
是、  
流布の、  
文政十年丁亥三月

浪華書林 岡田群玉堂主人謹誌

阿古義物語後編

全傳六本

出来

本町庵三馬遺意

狂訓亭主人做綴

前編世ふりて既に年何れもその局成法がよ

いふべきまを婦女子の書林をはりて嗣編とありて

ねまご二馬先生筆成たりて著此の向そむまびくを猶更

看官法遺憾催促阿古義法浦の唐くる禮門人三賢より折

のくみ口授せしむる條文ともくその序編を限りてまび式其の極こと

あまふ只文章の拙と云ふ罪なりてその序編の氷解は

禮記葉女干綺が石合し捕まるとる或は姑う三助抗の神通仇を打乃

一條亦床世女生肝をどうり段并才天女法靈夜神徳忠存節儀其の

たつとあめいとまはまの路を草紙あま

三賢改

楚満人をす

早引人物故事

東都關惟充著

横本全二冊

△人物故事とて上古神代より近世にいたるまで世々乃

希王公卿地下人等和歌竹文のなる名あまひ名僧

賢士の畧傳より幸朝傳門医学兼人徳沙孝士

列女の傳紀とて武勇勇士豪傑源誠赤

小ほらんどももるる。来歴時代とれ

た説と畧まら。らむいも拾遺よ名はる人、同人

好士の能い似傳傳優よつるやと名とりて

傳つりのも載つまびくつたり。且索る小述きと

要。いろはとて部類とてくらた人ハ伴誓三郎ハ

伊勢三郎義盛 八判官義経の家臣女三子内 四 康頼 八判官入

乃法名性照と号し治承元年謀叛より亡く鬼累清へ逐れ

後赦免東山双林寺に籠り頼朝公の時百五十尾品野同小

任八平物 二 延壽 八次濃國青暮長者が娘容兒甚いご

美よりあま朝仕へく妻より美朝亡びて後屋なる 義敷 七

改田藤十郎 八越後の人上流にて投者より天生和定のよきうて

費首より宝永六年卒ニテ死。此のうと世に同へる名の既

字といふは小記して早記と号。事筆の出入 平物 日本

杯と書してお傳と求る不便かしむ。古今人の好悪の

跡と尋ぬるに先し書は授く畧傳と云うを教部の群と

関するの費へるゝ年小故より早記の大合なり

# 文政 倭節用集悉改名人成

大本 全

△世小節用の大冊多しと云ども。古板のまに増補して再刻の物を  
字形篇を。止服工庸書の漢字少ふうに倭節用の系師  
侯野通志の依して字畫音訓を類後より穿はく悉改正  
てしれど加育季を大人控むつゝいの今古異同と校補  
雅俗の文字りゝに増益して世に利ふ。前後の余紙紙書  
等小和漢の山川名木同系事定と書き。世界万国日本國  
やび系江戸大坂市街案内。関郡等付和式漢式を馬  
等の國式太刀目流燈籠進物の徳めり。和漢勇武は乃  
備係畧傳も活版と諸礼うゝいの注釋も併料理献立

五花生果系漢委其基人相子筋指南。二世相方位日  
取音高。美御刻掛。堂上官威の沢百官名次苗字四季  
往來書状案文子形代文雛形。名宗切中。韻鏡の口傳  
諸病抄業呪術傳。刀扱古今鑑。し彫りの果。年中約  
三代武將傳。神代よりあ時よりり教子載の伝説あり  
室に秘書微細小三。そ外世作要用の雜事夥多集し  
文人雅客伴侶文房小流遠忘の多不傳大を量り。右巻  
下の目録一集として口受更祝近讀に教られ常々中巻小  
並々懇懐しりり師よりりてその道の上を達するは古来あり  
今中巻の南里よりり主人増補して凡三百五十余紙の

公母橋通



浪速書林群玉堂

河内屋茂兵衛版



